

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06875

研究課題名(和文) 開発実践と妖術に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Studies on the Relation between Witchcraft and Development

研究代表者

山口 亮太 (Ryota, YAMAGUCHI)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・特任研究員

研究者番号：80783422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、アフリカ熱帯林における開発実践と、その過程に出現する妖術言説に着目することで、従来の量的データに基づいた開発論からは抜け落ちてしまいがちであった、開発に関わる諸アクターの感情やリアリティに迫る可能性を提示することである。カメルーン共和国東南部国境地域とコンゴ民主共和国旧赤道州においてフィールド調査を実施し、社会的・経済的な現状を明らかにし、開発に関連した妖術言説の調査を通じて、地域住民に寄り添った開発実践の可能性について検討した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to suggest the importance of focusing on witchcraft discourses for carrying out the development project in African tropical forest regions. This point of view has the potential to approach emotions and reality of actors, which tends to fall out of development theory based on conventional quantitative data. Field survey was conducted in the southeastern border area of Cameroon Republic and Equator Province of Democratic Republic of the Congo. The author revealed current socio-economic situations of these areas and discussed the possibility of development project go along with the inhabitants.

研究分野：文化人類学、地域研究

キーワード：妖術 開発 熱帯林 アフリカ 人類学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、2008 年からカメルーン共和国およびコンゴ民主共和国（以下、DRC）において、妖術言説についての研究を行ってきた。その過程で、現地の人々にとって妖術は開発と不可分な関係にあることが判明した。一般に、アフリカ諸社会における妖術は、他者の成功を嫉妬することや自分が本来享受すべき利益がさえぎられているという感覚に端を発しており、当事者間に猜疑心と不和を引き起こすとされる。開発の文脈では、行政などの開発の主体にとって、妖術は住民間の猜疑心と不和を助長するため、開発の阻害要因として立ち現れる。カメルーン東南部の住民たちの場合においても、住民間の不和を説明する際に妖術に言及されることはごく普通に行われることである。しかし、開発に関しては、従来の研究で指摘されてきたような開発の阻害要因としてではなく、妖術こそが開発をひきよせるものであり、妖術抜きには地域の発展や開発は考えられないという言説が聞かれた。このような経緯から、妖術を住民間の不和と単純に結びつけることの問題性と、開発プロジェクトと妖術の関係そのものを見直す必要があるという着想にいたった。

本研究が対象とするアフリカ熱帯林地域における開発実践は、他地域と同様に行政や国際 NGO を主体とした従来のトップダウン式から、地域住民を主体とした住民参加型へとシフトしつつある。すなわち、地域住民をプロジェクトに不可欠のアクターとして位置づけ、プロジェクト立案・実施などの意思決定のプロセス、さらにプロジェクト実行の主体として彼ら自身を積極的に関与させるという手法である。こうした住民参加の理念は素晴らしいものの、そもそも、住民参加型アプローチ自体が単なる手段として用いられるにとどまっているという批判もある〔佐藤 2003〕また、住民参加型アプローチの想定する「住民」もまた、一様ではなく、プロジェクトに対する意見、参加の度合いもまちまちであるだろう。このような住民参加型開発プロジェクトの見直しの一つの潮流として、近年、開発に関わる様々なアクターの「感情」に着目した研究が行われはじめている〔e.g. 関根編 2015〕これは、従来の開発学などで議論されてきた、量的なデータに基づいた支援の技法や達成目標についての合理的な議論に対して、感情経験とは社会的・文化的なものであるとする感情社会学の立場を援用し、開発に関わる人々の感情に迫ることで、よりきめ細やかな開発実践を実現することを目標として掲げている。研究代表者がこれまで調査を行ってきたアフリカの妖術は、住民の感情と深く関係しており、従って妖術への理解を深めることが、より対象の人びとのニーズや現状に合った開発実践につながると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アフリカ熱帯林における開発実践と、その過程に出現する妖術言説に着目することで、従来の量的データに基づいた開発論からは抜け落ちてしまいがちであった、開発に関わる諸アクターの感情やリアリティに迫る可能性を提示することである。それを通じて、より対象の人々に寄り添った細やかな開発実践の提案を目指す。そのために、以下の3点を具体的に目指す。(1) 人類学的な調査によって、文化的、社会経済的な現状を明らかにする。(2) これまでの/現在進行中の開発プロジェクトについての住民の見解を明らかにする。(3) 対象地域における妖術と開発の関係と、その特徴について明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者がこれまで人類学的な研究を行ってきた、アフリカ熱帯林の二つの地域、カメルーン東南部国境地域と DRC 赤道州ルオー學術保護区ワンバ周辺（以下、ワンバ）において、以下の課題を設定し、両地域における開発と妖術の関係を分析・比較を行う。上記の目的(1)については、これまで行ってきた人類学的調査を拡充する形で、地域住民の社会関係、生業、妖術言説に関係した基礎情報の収集を継続する。特に、開発に関連した妖術言説についての收拾を集中的に行う。(2)については、対象地域においてこれまで行われてきた開発プロジェクトについて、それがどのような経緯で行われ、それに関係した諸アクターが誰であり、どのような経過をたどり、自分たちの生活にどのような影響を及ぼしたのか、プロジェクトの終了はどのようなものであったのか、ということについての地域住民自身の見解を調査する。また、それぞれの調査地において現在進行中の開発プロジェクトについて、住民の見解に加えて、プロジェクトを主導する人々の見解についてもあわせて調査する。(3)については、(1)および(2)を二つの地域で比較することによって、それぞれの地域における開発のどのような場面で、どのような妖術言説が生起するのか、そしてそれが地域住民の行動と開発の進展にどのような影響を与えるのかを検討する。それを通じて、両地域における妖術と開発の関係、そしてその特徴を明らかにする。

4. 研究成果

現地調査の結果、まず、カメルーン東南部と DRC 赤道州の二つの対象社会の文化的、社会経済的な状況が明らかとなった。カメルーン東南部のバントゥー系農耕民バクエレは、分散的で緩やかな社会構造を持ち、経済的にはカカオ栽培という比較的安定した現金獲得手段を持つ。まずこの地域に開発の手を伸ばしたのは、ドイツ植民地とフランス植民地であった。ドイツ植民地期の 1886 年には、

この地域の中心都市ムルンドゥの開発が着手される [Akolea 1994]。当時のこの地域の主要な産物は、象牙と生ゴムであった。この地域に本格的に開発が進展してくるのは、カメルーン独立後の 1970 年代～80 年代初頭である。この頃、政府の方針により、東部州の各地で外国籍企業による伐採活動が行われるようになった [Joiris 1998; 市川 2002]。この地域にも、1970 年代前半には二つの伐採会社が操業を開始した。彼らは、木材輸送のために道路を建設・整備し、働き手となった村人たちのために病院や学校などの建設と運営を行っていた。この時期に、カメルーン北部からムスリム商人たちがやってくるようになり、現金経済が急速に浸透した。1980 年代のカメルーンのエconomic危機などをうけて、二つの伐採会社は撤退して以降、主たる現金獲得手段はコーヒーやカカオの栽培に移行した。しかし、カメルーンのエconomic状況のさらなる悪化から、道路の整備が行われなくなった。1990 年代から国際 NGO の WWF が拠点を置き、生物多様性保全活動を断続的に展開している。

DRC 赤道州のバントゥー系農耕民ボンガンドは、強固な父系親族集団の絆に基づいた縦型の社会構造を持つ。この地域の開発は、コンゴを植民地化していたベルギー人によって行われた。植民地期には、キリスト教ミッションがこの地域で活動しており、彼らが病院や教育などを担っていた。経済的には、1980 年代半ばまでは、コーヒーやアブラヤシを換金作物として栽培し、外国籍のプランテーション企業に対して販売していた。大規模なゴムのプランテーションも存在した。これらの外国籍企業は、大型トラックで商品の買い付けを行うと同時に、塩、石けん、油、布などの日用雑貨の販売も行い、商品流通の要となっていた。しかし、80 年代の一次産品価格の下落、90 年代の内戦以降、外国籍企業は撤退し、現在にいたるまで戻っていない。そのため、この地域は現金獲得手段と商品流通網の二つを同時に失うという、生存の大きな危機にさらされることとなった。この結果、若年層を中心に、東部の大都市キサンガニ近郊まで往復約 500 キロメートルの道のりを歩く、長距離徒歩取引に従事するものが増加した [Kimura et al. 2012]。販売される主な商品は、乾燥魚、乾燥獣肉、鱗翅目の幼虫、キノコといった森林物産、キャッサバやトウモロコシなどの農作物やその加工品である蒸留酒である。このような経済的な状況の一方で、この地域は、希少な大型霊長類ボノボの生息域にあたり、1970 年代から日本人研究者が調査をおこなってきた。90 年代には、ワンバ周辺の森林がルオー学術保護区として登録され、保護区内における銃猟の禁止などが定められた。内戦後の 2000 年代半ばからは、日本人研究者の他に、国際 NGO である AWF と現地住民が組織した NGO が協力しながら保全活動や、農業支援や家畜飼育の推奨など住民

の生活改善を目指した開発を行っている。

妖術言説と住民の開発プロジェクトへの見解については、カメルーン東南部では火力発電施設の導入とその故障に関する事例を現地調査で確認した。行政、電力会社、伝統的権威、地域住民の思惑の齟齬が、個人と企業の間で働く妖術についての想像力を喚起させたということを示した。また、1970～80 年代にかけて操業していた伐採会社の到来や、彼らの建設した道路の位置などについて、強力な妖術者が開発を引き寄せたと理解されていることが分かった。また、妖術関連の問題は「慣習」の問題であり、司法や行政が関与するべきではないと考えられていることがわかった。このため、妖術関連案件は村長などの地元の権威者たちによる調停が行われ、可能な限り行政や司法の介入を拒否するという傾向が見られる。一方、DRC の場合、妖術はジェンダー化されて語られる傾向が顕著である。強固な父系親族集団の内部に外から嫁いできた女性が破滅をもたらすという妖術の語り的一方、開発との関連で語られるのは男性の妖術者である。彼らは、呪薬を用いて自分の願望を満たすために、親族や近い友人を生贄に捧げるといわれる。このタイプの妖術者は、「あれもこれも掴む」と現地では表現され、典型的には、一般の住民よりも高学歴で公的な役職に就き、外部社会との結びつきが強いような人物があげられる。このように、開発によって地域社会にもたらされた住民間の社会的・経済的格差と不均衡が、「あれもこれも掴む」という表現で妖術言説に現れることを明らかにした。

以上から、対象地域で実施されている開発事業は、開発にまつわる多様な妖術言説を生起させるが、それが住民間の不和として表現されるか否かは地域的・社会的文脈に強く依存していることがわかった。また、カメルーンのエconomic事例のように、妖術関連の問題に行政や司法が介入することを好まない人びとが存在することも明らかとなった。これは、在来問題解決の枠組み・仕組みに配慮した開発実践の必要性を喚起させるものであり、この両者の両立・調停がいかにして可能であるのかは今後の課題である。

<引用文献> 佐藤寛. 2003. 「参加型開発の『再検討』」佐藤寛編著『参加型開発の再検討』アジア経済研究所, pp. 3-36. 関根久雄. 2015. 『実践と感情 - 開発人類学の展開』春風社. Akolea, A.F. 1994. *L'Evolution Historique d'une Ville du Cameroun 1896-1982 : Le Cas de Moloundou (Département de la Boumba-Ngoko)*. Mémoire présenté en vue de l'obtention du Diplôme

de Professeur de l'Enseignement
Secondaire de Deuxième Grade (Di. P. E. S.
II). Université de Yaoundé I. 市川光雄.
2002. 「『地域』環境問題としての熱帯雨林
破壊 中央アフリカ・カメルーンの例から」
『アジア・アフリカ地域研究』2: 292-305.
Joiris, D.V. 1998. *La Chasse, la Chance,
le Chant: Aspects du Système Rituel des
Baka du Cameroun*. Thèse de doctorat en
Sciences Sociales, Université Libre de
Bruxelles. Kimura, D., H. Yasuoka & T.
Furuichi 2012. *Diachronic change of
protein acquisition among the Bongando in
the Democratic Republic of the Congo*.
African Study Monographs Supplementary
Issue, 43: 161-178.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山口亮太. 「誰が電気を止めたのか
カメルーン東南部国境地域における妖術を
めぐって」電子ジャーナル『SYNODOS』(2017
年 2 月 28 日発行)(Link:
<http://synodos.jp/international/19177>)

〔学会発表〕(計 1 件)

山口亮太. 「コンゴ民主共和国の農耕民
ボンガンドの食料獲得」日本アフリカ学会第
54 回学術大会、信州大学、長野。5 月 20 日
- 21 日、2017 年。(口頭・査読なし)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

山口亮太. 「第 5 回：森のキャンプへの
道のり」特定非営利活動法人アフリック・ア
フリカ、『エッセイシリーズ「森と河をつな
ぐ コンゴにおける水上輸送プロジェクト
の挑戦」』(2018 年 6 月 7 日発行)(web link:
[http://afric-africa.vis.ne.jp/04africa/
waiwai05.htm](http://afric-africa.vis.ne.jp/04africa/waiwai05.htm))

山口亮太. 「第 2 回：森に暮らす農耕民
ボンガンド」特定非営利活動法人アフリッ
ク・アフリカ、『エッセイシリーズ「森と河
をつなぐ コンゴにおける水上輸送プロジ
ェクトの挑戦」』(2018 年 3 月 30 日発行)(web
link:
[http://afric-africa.vis.ne.jp/04africa/
waiwai02.htm](http://afric-africa.vis.ne.jp/04africa/waiwai02.htm))

山口亮太. 「森の中の商人の憂鬱」特定
非営利活動法人アフリック・アフリカ、『ア
フリカ便り』(2017 年 12 月 13 日発行)(web
link:
[http://afric-africa.vis.ne.jp/essay/gen
eration35.htm](http://afric-africa.vis.ne.jp/essay/generation35.htm))

山口亮太. 「書評 津村文彦著『東北タ
イにおける精霊と呪術師の人類学』めこん、
2015 年、312pp.」、『文化人類学』日本文化人
類学会、No. 82(1), pp.95-98. 2017 年 (DOI:
[https://doi.org/10.14890/jjcanth.82.1_0
95](https://doi.org/10.14890/jjcanth.82.1_095))

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口亮太 (YAMAGUCHI, Ryota)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・
研究員

研究者番号：80783422

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()